

## 令和8(2026)年度 選考委員コメント一覧

### 瀬田史彦委員長（東京大学）

今年度（2025年度）も、6人の委員の先生方とともに本活動助成の選考に携わった。採択させて頂いたものはもちろん、残念ながら採択できなかったものの中にも、創造的なアイデアと高いモチベーションで地域を盛り上げようという素晴らしい提案が非常に多くあった。限られた数を選出するのは常にとっても難しい。

助成としての選考ポイントは6点あげられているが、個人的に特に気にしているのは、その提案が実現したときに、具体的にどのような独自性のある成果が得られそうか、そしてその成果の他の地域への応用性がどの程度ありそうか、ということだ。それらを紙幅の限られた提案書からなるべく正確に読み取ろうとする。

具体的な成果が十分期待できることを確認するために、まずその提案のための準備が十分かを確かめる。すでに具体的な実績があれば確信を得るのは簡単だ。しかしそうした実績がなくても、関連した自主活動を仲間とやってきたとか、計画をじっくり練り上げてきたといったことが読み取れると、期待が膨らんでくる。そして提案の実現に必要なかつ十分なリソースとして何が想定されているのかを確認する。どの程度を自前で、あるいは他の財源から用意するのか。それらを踏まえ、本助成のサポートを仰ぎたいものの内容、そしてその必然性が理解できると「これは支援しなければ」となる。予算の使途が具体的に書いてあれば、より確証が持てる。

提案の独自性は、本助成が全国レベルで公募を行っているからこそ、委員として気にしたいことだ。社会的に意義の高い活動でも、どこにでもある活動ならば、地元の支援を得るべきだろう。これまで他でやられたことがない、日本で初めて、さらには世界でも例がない、というアイデアを実現しようとしていけば、それが成し遂げられる姿を想像してわくわくする。しかし同時に、実現された提案が他の地域にも応用可能であることも気にかけている。他地域にも応用されれば、本助成の意義が将来にわたって高められる。

以上は、私が今年度の選考において、個人として特に重視したことだが、実際にこうした自分の想像・期待の通りに活動が進んでいるかどうかは、これから直接、間接に様子をお伺いしながら確かめていきたい。

### 井本佐保里委員（日本女子大学）

審査委員2年目を務めました。今年度より部門が一本化されました。多様な活動を同じ土俵で評価しなければならぬ難しさがあるかと思いましたが、結果的には、ソフトより／ハードよりのものを一緒に審査することで、地域や住まいに対して本当に何が大切なのか、というよりメタな視点で審査・議論することができたように思います。

そのような中で、私自身が審査において重視したのは以下の5点です。①地域住民が中心的に関与しているもの、②地域の自治をしていく意識が見えるもの、③被災や過疎、放置された地域資源など、地域固有の課題や資源を捉えているもの、④単なるイベントや建物の改修ではなく、空間への手入れと運営が両立しているもの、⑤土地や建物の管理の新しい担い手を生み出そうとしているもの。また助成は1年間ですが、活動自体はより長い時間続いていくものになります。今回助成することで、今後の活動の何かツボ

を押すことができるようなイメージが持てるかという点も重視しました。

今回選定された活動を実際に訪れるのを大変楽しみにしています。

#### 梅宮路子委員（日本ナショナルトラスト）

申請書を拝見しながら、人口減少等様々な要因によりコミュニティの維持が困難になっている地域が確実にあることを痛感しました。行政の支援だけでは足りない部分を地域の団体がソフト、ハードの両面で活動を担い、ハウジングアンドコミュニティ財団が資金的なサポートすることに意義を感じます。申請書を拝見するときには、できるだけこのような背景となる地域の状況や課題を読み取るようにしています。

申請書を書く上で、例えばテーマ性や先進性を打ち出すのは難しい取組みでも、地域が置かれた状況や将来的なストーリー展開、申請者の熱い想いをしっかりと書いて頂くと審査員には伝わるものがあります。参考にして頂ければ幸いです。またこの助成金を、活動継続や組織の存続の一時的なつなぎとするのではなく、しっかりとした基盤をつくり次のステップにするための足掛かりとして頂ければ幸いです。

審査結果に限らず、これだけ多くの団体が地域コミュニティを豊かにしようと力強い活動をされていることに勇気づけられます。今後の皆さんの活動を楽しみにしています。

#### 名畑恵委員（錦二丁目エリアマネジメント）

まず審査を通じて強く感じたのは、これほど多くの方々が、自分たちの地域や暮らしを自らの手で育もうとしていることへの深い感謝の気持ちです。

応募されたすべてのプロジェクトにはそれぞれの必要性和意義があり、選考にあたっては大変悩ましく、審査会でも濃密な議論が交わされました。

私が重視したのは、課題の捉え方と事業そのものの誠実さ、そしてその取組によって地域にどのような変化が生まれていくのかという点の説得力です。

その中でも、ややチャレンジ要素の強いものであっても、多様な地域課題解決の手法がある中で新規性を備え、これから社会に問いかけていく意味や可能性を感じさせる取組には「期待」を込めて評価しました。また、今回は災害や気候変動といった状況を背景に、緊急性の高い課題に向き合う取組も印象に残りました。

採否に関わらず、それぞれの地域が持つ人や文化を含む多様な地域資源を生かしながら課題に向き合うことで、唯一無二の価値を生み出していくものだと感じています。

#### 萩原拓也委員（名城大学）

今年度の申請も住まいやまち、そしてそこに暮らす人々に真剣に向き合った様々な活動提案がなされており、助成に至らなかった申請も含めて気づきや発見が多く、大変読み応えがありました。

その中で、私個人としては「若者のチャレンジ」や「今、助成が必要な取組み」を念頭に審査しました。今回の申請全体を見ても、持続的で豊かな住環境づくりに関心を寄せているのは、中高年世代が中心です。少子高齢化の中、若い担い手を社会全体で育成することは急務であり、大学生を含む20代が示した現代的なアプローチや瑞々しい発想に期待を込めて評価させていただきました。

また、今も深い爪痕が残る能登半島地震・豪雨の被災地では、行政によるきめ細やか

な支援が困難な分野も多くあり、民間ベースで人々の暮らしの再生や心の復興を目的とする活動は、優先度高く助成が必要と考え、できるだけ取り上げさせていただきました。一方で、被災地に限らず、行政に頼り切ることができなくなりつつある地域も増えていきます。これに対して、地域の方々自らによる公共のあり方の問い直しや、自治を取り戻すための取り組みにも大変刺激を受けました。

申請された全ての団体の活動が益々発展されることを祈念しております。

#### 山田翔太委員（世田谷トラストまちづくり）

助成金の申請という観点から、私が審査で重視した点をコメントします。申請書はみなさんと事務局や選考委員とをつなぐ、唯一のコミュニケーションツールです。みなさんの活動の必要性と想いを、言葉や図で伝える必要があります。具体的には、地域課題をどのように捉え、今回の取り組みによって何が達成できそうか。目の前にいる人々が幸せになるミクロな視点と、まちが良くなっていくマクロな視点の両方を持ち合わせ、具体的に何を仕掛けていくのか。そして、どのような主体と連携し、どのような支出を計画しているのか。1年という限られた期間、今の組織体制で何を実行すべきで、何が可能なのかという点において説得力のあるものを高く評価しました。

まちづくりのおもしろく、難しい点は、実践すればするほど新たな地域課題が明確になっていくことです。活動が深化すると、これまで見えていなかったことが見えてきます。新たなチャレンジができるときは果敢に取り組んでもらいたいですが、課題の全てをみなさん自身で解決し続ける必要はありません。みなさんの取り組みをきっかけに、まちに新たな動きが生まれ、それが連鎖していくことが、暮らしやすいまちへとつながっていくのだと思います。「コミュニティづくり」に終わりはありません。みなさんの取り組みが地域に新たな芽吹きをもたらし、みなさんがそれを後押ししていくような存在へと発展されることを願っています。

#### 久田見卓委員（ハウジングアンドコミュニティ財団）

令和8年度の助成にあたり、全国から172件のご応募をいただきました。応募団体の皆様に深く感謝を申し上げますとともに、企業や行政では取り組むことが難しい地域の社会課題の解決に向けて、果敢かつ真摯に取り組まれている姿にあらためて敬意を表するところでございます。

選考にあたりましては、地域のコミュニティ醸成とまちづくりに関わる課題に明確な立ち位置と解釈をもって実践的に活動されていること、また計画が具体的な方策と日程にまで落とし込まれているかどうか、に重きをおき評価をしました。さらに喫緊の対応を要すると思われるもの、また取り組みが広く他の地域の方々に感銘を与え参考となるものを一層高く評価をしました。

一方、今回助成に至らなかったご提案の中には、応募要項をもう少し理解していただきたいと思われるものもあれば、地域特有の事情からか提案が少し特異すぎ地域の方々と調整を要するのではと感じるもの、また他方で、説明が伝わらずこちらがうまく理解、消化ができないまま僅かな差で選から漏れたものもありました。何卒熱意を冷ますことなく見直し再挑戦を願っております。

(以上)